

小学校における外国語学習の可能性

— ネイティブスピーカーとの体験的外国語学習での教材開発をめざして —

小学校における外国語教育研究会議

佐藤 裕之¹ 吉澤 寿一² 国嶋 信³ 石川奈緒美⁴ 小池優一⁵

要 約

昨年度、小学校教諭2名・中学校英語科教諭2名のメンバーで、英語を媒体として外国人と触れ合う交流体験を積み重ねることで、小学校段階において外国語に対する動機付けや、言葉の壁を越えた文化の交流や理解を深めることの有効性などについて研究をおこなった。今後、小学校段階において国際理解教育一環としての視点から「『総合的な学習の時間』を活用したり、『特別活動』などの時間において、学校や地域の実態等に応じて、子供たちに外国語、例えば英会話等に触れる機会や、外国の生活・文化などに慣れ親しむ機会を持たせることができるようにすることが適当である。」との答申がなされたことはすでに誰もが知るところである。今年度、本研究では基本的考え方の一として、外国人講師と簡単な言葉のやりとりや、歌を歌ったり、身体全体を使ってゲームを楽しむことで、外国語学習・国際理解教育のきっかけになるのではないかと考えた。知識や技能を高めることよりも、楽しい英語の活動を繰り返すことにより、慣れ親しむことを第一に考えた。こうした活動が子供の自信となり、活動意欲を高めることにつながるだろうと思われる。

また、二つめとして昨年度の研究の柱でもある「誰でも・どこでも」の活動案づくりを目指した。新しい教育課程編成の中で、各小学校でのこうしたネイティブ・スピーカーとの外国語活動の実践が計画・実施されることがさらに予想される。小学校での外国語教育の取り組みはこれまでの中・高での外国語教育とは違い、担任の先生方が中心となって実践していくもので、このような実態からもさらに、誰にでも実践できる教材の条件整備をしていく必要があると考える。

ネイティブ・スピーカーと行う授業で開発した教材を実際の授業を通して検証しまとめた。今後さらに実践を通してのアイデア・マニュアル制作をしていく考えである。また、研修を通しての伝達・紹介をしていく必要があると考える。

キーワード：小学校、外国語教育、総合的な学習の時間、英語学習、ALT、教材開発

目 次

I 主題設定の理由	208	3. 授業研究1, 2	209
1. 基本的な考え方	208	III 研究の成果と今後の課題	209
(1) 仮説	208	1. 研究の成果	209
(2) 「だれでも、どこでも」を目指して	208	(1) アンケートの結果から	209
(3) 人(外国人)とのかかわり		(2) 授業後の子供の感想から	210
コミュニケーションを行う楽しさを体験する	208	2. 今後の課題	210
II 研究の内容	208	おわりに	210
1. 研究の方法	208	参考文献・指導助言者	210
2. 活動実践例	208		

¹川崎市立幸町小学校教諭(研修員)

²川崎市立小倉小学校教諭(研修員)

³川崎市立富士見台小学校教諭(研修員)

⁴川崎市立百合丘小学校教諭(研修員)

⁵川崎市総合教育センター研修指導主事

I 主題設定の理由

平成10年度に、小学校における外国語（英語）学習を通じての国際理解教育の研究を行った。本研究会議は、それを受けての第二次研究となる。¹⁾川崎市総合教育センター紀要第12号では、新教育課程の時間枠の中で、国際理解教育の一環としての外国語（英語）学習の可能性を考え、小学校現場の参考としての活動事例集の作成を課題として取り上げた。外国語（英語）学習の機会が与えられながらも条件整備がまだ不十分な中、各小学校で新たに取り組む上でのひとつのガイドラインになると考え、ネイティブ・スピーカーとの体験的外国語学習での教材開発をめざすことにした。

1. 基本的な考え方

(1) 仮説

「英語を媒体とした外国人と触れ合う活動を重ねることにより、自然な形で、共感をもって人々とかかわろうとする態度が養われ、そのことによって外国人に限らずにコミュニケーションを積極的に行おうとする態度が養われるであろう。」

(2) 「だれでも・どこでも」を目指して

平成14年からの新学習指導要領では、総合的学習の時間などで外国語や外国の文化などに触れる機会をもたせることが可能であるとの告示がなされた。小学校の現状では、専科の教員配置、教員研修や、授業での手引きなど、実施していく上での条件整備が必要とされる。いくつかの条件が整えば、今後、実施を計画する学校がでてくる事が期待される。子供たちが、外国人と直接接することを通して得た異文化との触れ合いの喜びや職員も含めての学校全体の活性化を、その他の学校にも広げる環境づくりができないかと考えた。

(3) 人（外国人）とかかわり、コミュニケーションを行う楽しさを実体験する。

「人とかかわりを大切に、外国人とも物怖じせずかかわろうとする態度が育ってほしい。」こうした教師の願いから、ALTと直接交流することを通して、他の文化を持つ人たちとも基本的な考え方は同じであることに気付くことで、共感をもってコミュニケーションを図ろうとする態度が育つと考える。

外国人との直接的な交流から、その人の国柄、生活様式、考え方等が表れるような事柄を活動内容として取り入れた。

II 研究の内容

1. 研究の方法

- (1) 研究開発校などの取り組みや中学校での活動集などを参考に活動案を作成する。
- (2) 授業を通して子供たちが楽しめ、積極的にかかわれる活動かどうかを検証しながら活動事例を集積していく。
- (3) 子供の英語授業に対するアンケートをとり、意識の変容を読みとる。
- (4) 今後、他の小学校で英語活動を導入する際のガイドライン及び参考資料として活用してもらうための実践資料集を作成する。

2. 活動実践例

- (1) Color 旗揚げゲーム
- (2) 英語カルタ
- (3) 風船バレーボール
- (4) ○□△シェイプ探しゲーム
- (5) ジェスチャーゲーム
- (6) 相手をほめる言葉を全身で表現
- (7) シャーク・アタックゲーム
ベア・アタックゲーム
- (8) フルーツバスケット
動物鳴き声バスケット
色、数字、食べ物、スポーツバスケット
- (9) ビンゴ（色、数字、食べ物、スポーツ）
- (10) 歌、チャンツ、ダンス
- (11) ALTのヒントによる人当てゲーム
- (12) あいさつ名刺交換ゲーム
- (13) 英語あいさつすごろくゲーム
- (14) 絵カードめくりパフォーマンスゲーム
- (15) 動物絵カードゲーム
- (16) じゃんけんゲーム
- (17) カフェテリアごっこ
- (18) ハンバーガーショップごっこ
- (19) 買い物ごっこ
- (20) スキット（あいさつ、自己紹介、道案内）
- (21) インタビュー（What ~do you like? を使って）
- (22) Show and Tell（自分の宝物）
- (23) ALTによる絵本（Big Book）の読み聞かせ
- (24) パネルシアター ,etc.

¹⁾川崎市総合センター「研究紀要」第12号：p. 222

学 習 内 容 と 活 動	
ウ オ ー ミ ン グ ア ッ プ	<p>①あいさつ Hello. Good afternoon. How are you? I'm fine, thank you.</p> <p>② ABC Chant Song: "You & Me"</p> <p>③ ジャンケン・チャンツをしながらジャンケンをして連続で勝ったら A L T と挨拶と握手をする。</p>
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ヨ ン の 場	<p>④セサミカード集めゲーム Ernie, Bert, Big Bird, Elmo, Grover, Zoe のカードを集める。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>P: Excuse me. Do you like Big Bird? T: Yes, I do. P: Do you have a Big Bird card? T: Yes, I do. T: No, I don't. P: Please give me. P: Thank you. T: Is this the Card? See you again. P: Yes. T: Here you are. P: Thank you. See you again.</p> </div> <p>⑤○□△シェイプ探しゲーム フロアーに新聞紙で作った ○ circle □ square ◻ rectangle △ triangle を敷き、聞こえた形の上に素早く乗る。</p> <p>⑥ Do you like ~?、Do you have ~? を使って A L T に質問する。 A L T は答えた後に質問した児童に同じ質問を繰り返す。</p>
あ い さ つ	<p>⑦ T: Good-by. See you again. P: See you again. Thank you.</p>

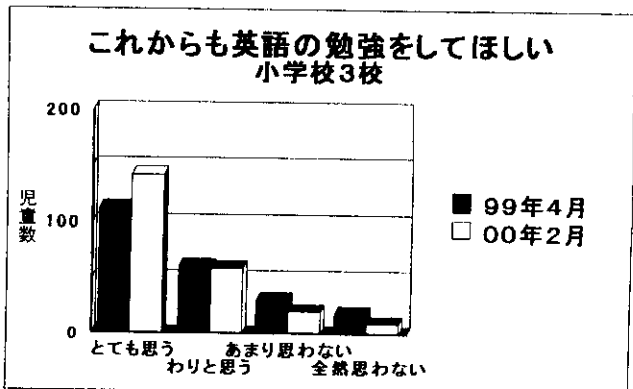
学 習 内 容 と 活 動	
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ヨ ン の 場	<p>①あいさつ Good afternoon. My name is ~. I like ~. And you?</p> <p>②パネル・シアターで Story を聞く。 ホワイトボードに絵を順次貼っていきながら絵本を Story Telling する。</p> <p>③ジェスチャー・ゲーム カードを使いジェスチャー表現の違いを知る。</p> <p>④グループでカード・ゲーム ・一人ずつカードを引く。 ・グループの他のメンバーは何のカードを持っているかを質問する。 What do you have? ・カードを引いた者は、質問に答えた後カードに描かれていることについて演じる ・順番に繰り返す。</p> <p>⑤ ABC の歌を歌う。 終わりのあいさつ</p>

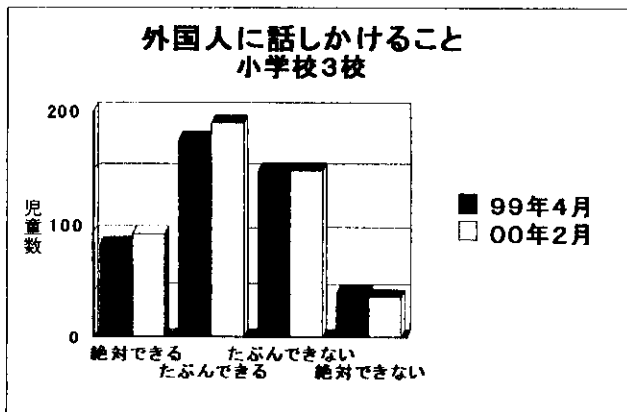
Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

(1) アンケートの結果から

研究チーム3校で99年4月と2000年2月に同じ質問で子ども向けアンケートを実施した。10数回の学習を行った結果、数字に表われる子供たちの大きな変化は見取することは難しいが、多くの子供たちはA L T との触れ合う学習を今後とも望んでいることが認められる。以下にそのアンケートの一部をあげた。





(2) 授業後の子供の感想から

なんだか英語という外国のことは話しているという感覚がまったくなく、日本語をはなしているようだった。ALTの先生達のほとんどが、明るくてとっても楽しい。もっと外国の言葉を話してなれて行きたいと思った。ゲームなどで英語になれるのいいが、やっぱりもっと先生とはなす機会を増やしたい。でもやっぱり楽しかった。
(O小6年生・子どもの感想原文を打ち直し)

2. 今後の課題

- (1) 更に新しい活動実践を重ねながら、活動事例を開発していきたい。また、歌・チャンツをどのような形で授業に組み込んでいくかは今後の課題の一つである。
- (2) 実際の授業では、ほとんどの場合ALTの物理的・時間的な子供たちへのかかわりがほとんどであり日本人教師の側からは、子供の実態を踏まえてのシラバス・コーディネーターとしての役割を果たしていかななくてはならないと考える。そのためには、活動集を利用したのALTとの授業実践ワークショップ等を実施し、実際に研修をしていく必要性を強く感じる。
- (3) ALTを受け入れる際の日本人教師用受け入れマニュアルづくりも考えられる。活動事例集に載せることでより利用価値があると考えられる。
- (4) ALTとのチーム・ティーチングが授業の基本と考えた場合、今後、活動事例集は英語・日本語での対訳の形式で作成していくことでALTとの事前のミーティングでも利用価値が上がると考える。また、必要に応じてサンプルビデオも制作する必要がある。

おわりに

公立小学校における英語学習が、巾広い目標の中でも、子供が英語という媒体を使って楽しく「言葉のキャッチボール」ができたなら、それである程度は成功だろうと考える。ALT、教師は、子どもが楽しくキャッチボールするための良き支援者でありたい。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導いただきました川崎市小学校国際教育研究会会長、渡邊誠一校長先生はじめ国際教育研究会の先生方、また、快く公開授業をしていただきました国本小学校校長先生、入江潤先生に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 「小学校英語教育の現状と展望」
図書教材研究センター 1997年
- 「小学校における英語学習に関する研究」
相模原市教育研究所 1997年
- 「教育ジャーナル」97年7月号 1997年
- 「教育ジャーナル」97年12月号 1997年
- 「小学校への英語教育導入に関する考察」
福岡県教育センター 1997年
- 「英語活動の指針Ⅰ」 金沢市教育委員会 1997年
- 「学習情報研究」7月号 1998年
- 「相模原市公開授業参観資料」相模原市立相模台小学校 1998年
- 「英語科における国際理解教育」 大修館書店 1999年
- 「英語教育」10月号 大修館書店 1999年
- 杉田洋他『うちの子ペラペラになれるかな?』
旺文社 1999年
- 「小学校における外国語学習指導案集」
姫路市教育委員会 1999年
- 「鈴鹿市立椿小学校実践報告会資料」鈴鹿市立椿小学校 1999年
- 「朝日新聞 記者の日」 1999年12月
- 「川崎市総合教育センター紀要」第12号 1999年

【指導助言者】

- 川崎市立小学校国際教育研究会会長 渡邊 誠一
(川崎市立柿生小学校校長)
- 私立国本小学校英語科講師 入江 潤